

# 100年先につながる感幸地づくり

かんこうち

牛久沼「感幸地」構想（龍ヶ崎市牛久沼活用構想）を策定しました

～牛久沼はまちの資産。資産はさらに磨きをかけることで「感幸地」として輝きだす～

※構想冒頭より

問い合わせ：龍ヶ崎市道の駅・牛久沼プロジェクト課

## 牛久沼の豊かな自然に磨きをかけ「感幸地」へ成長を

### 牛久沼の活用への一歩

未だ手つかずの自然が残る牛久沼。

多様な動植物が生息し、感動的な夕陽が望め、都心から約1時間という恵まれた立地条件にもかかわらず、これまで、牛久沼はあまり注目されることがなく、その活用という点においては、地域の人々とは遠い存在となっていました。

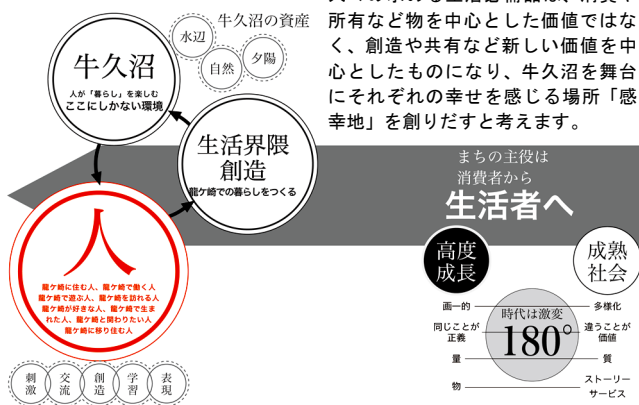
そのような中、市は「龍ヶ崎市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成27年12月策定）の中で、牛久沼の豊かな自然環境と調和した道の駅を整備し農産品や加工品の販路拡大を図り賑わいを創りだすこととしました。

これに並行して、長年の懸案であった牛久沼の帰属に関する課題が整理されたことにより、沼周辺自治体と連携した広域的なまちづくりを推進していこうとする機運が醸成されてきました。

こうした状況の変化を踏まえ、牛久沼全体を市民の憩いの場として、新しい名所とすべく、全国各地にてまちづくりのデザインなど、多岐にわたるプロジェクトを手掛けている（株）北山創造研究所（北山孝雄代表）と「牛久沼を活かしたまちづくりに関する協定」を締結し、同所の総合プロデュースのもと、この度、牛久沼の活用のランドデザインと定めました。

人々の求める生活必需品は、消費や所有など物を中心とした価値ではなく、創造や共有など新しい価値を中心としたものになり、牛久沼を舞台にそれぞれの幸せを感じる場所「感幸地」を創りだすと考えます。

まちの主役は消費者から生活者へ



### 牛久沼の目指す方向性

今回のプロジェクトでは牛久沼を次の時代の価値を生み出す場として捉えることから始めました。

牛久沼の「水辺」「自然」「夕陽」など人々の心を動かす環境を舞台に刺激や交流、学習や表現の場を作り出すことで地域の人々が毎日通って日々の生活を充実させる「まちの居間」のようなものがつくられると考えます。

そして「まちの居間」であらゆる経験をし、成長した人々が牛久沼を舞台に新しい時代の暮らしをつくる。そういった牛久沼とまちと人との成長の連鎖が充実した生活に繋がると考えます。

### 牛久沼の概要

霞ヶ浦、涸沼に次ぐ県内第3の湖沼で、龍ヶ崎市、牛久市、つくば市、つくばみらい市を流域とし、西谷田川、谷田川、稲荷川などが流入しています。牛久沼は小貝川が氾濫し、大量の土砂が堆積したためできた堰止湖です。

古くから農業用水として周辺地域の農業に欠くことのできない水源となっていることはもちろんのこと、白鳥、カモ、ウナギやワカサギなど、様々な生物が生息し、漁場としての利用に加え、釣りや自然観察の場として、地域の人々に多くの恩恵を与えてくれる重要な地域資源です。

### 牛久沼（龍ヶ崎市佐貫町）



# 流行り廃りの影響を受けない「感幸地」へ

## 観光地→感幸地

本構想では一般的な観光地ではなく、「感幸地」という言葉を用います。

これは、単なる観光客集めではなく、長い時間をかけ、牛久沼を育てていくことで他の地域には真似できない「名所」へと成長すると考え、地域の人々が日常的に集うような、水辺に触れ、夕陽を眺めるような憩いと幸せを感じられる場所にしていくという思いが込められています。

## 「感幸地」の誕生



これからは消費から創造の時代へ  
これからは所有から共有の時代へ

ここに住んでよかった。  
ここで働いてよかった。  
ここに遊びに来てよかった。  
ここに生まれてよかった。

### 「龍ヶ崎でよかった」

ここに賑わいがあったよかった。  
ここに自然があったよかった。  
ここに人がいてよかった。  
ここで生きてよかった。

龍ヶ崎に「牛久沼」があつたよかつた。

「感幸地」は名誉やお金など概念的な幸せではなく、私達の感性を直接刺激するようなコンテンツが中心となると考えます。

## 名所化への3つのサイクル

「自然環境の名所化」「道・広場の名所化」「賑わいエリアの名所化」。本構想は名所化を大きく3つのカテゴリーに分類しました。

そして、それぞれのカテゴリーには時代の変化や人々の趣向の移り変わりに合わせて、変化すべきタイミングがあると考えます。

サイクルが一番長く、手をかければかけるほど価値を蓄積させるのは「自然環境」です。牛久沼の水辺や草木は明治神宮の森のように100年先の理想を描き時間をかけて育てていくことで他の地域には真似できない価値へと成長すると考えます。

そうした自然環境に寄り添うように計画する道や広場などの「公共スペース」は、地域の人々が日常的に使える飽きのこない場作りを50年のスパンで整備していくことが必要です。

そして、時代や趣向の変化に影響を受けやすくなる施設のサイクルが一番早いのは商業を軸とした「賑わい」です。ネット社会の到来で商業にまつわる条件は日に日に変化し、15年先の賑わいでも予測が困難な状況が今の時代です。そうした大きなうねりに対応できるように施



賑わいをつくる  
15年

■サンストリート亀戸■  
広場では定期的にイベントが開催されたり、子どものための遊び場が設置され、ものを買う人も買わない人も思い思いに集い、時間を過ごすことができる居場所となった。



道・広場をつくる  
50年

■サンフランシスコ ベイトレイル■  
サンフランシスコ湾を一周する、自転車と歩行者のトレイルコース。1986年にアイデアができ、今後はさらに延伸し、47の都市と9つの郡の海岸線を結ぶ計画が進行中。



自然環境をつくる  
100年

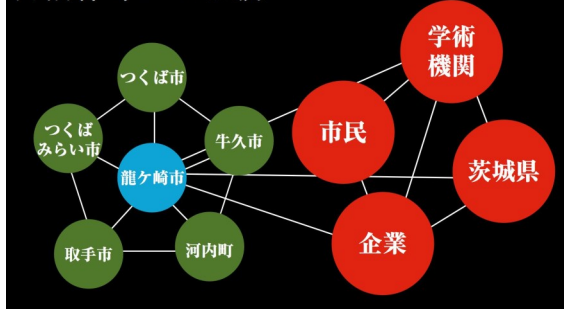


■神宮の森■  
神宮建設当初は広大な荒地だったが、100年かけて鎮守の森となるように計画された。

3つのサイクルのイメージが参考となった。

設づくりも15年を目安にリニューアルや建替えに対応できる計画が必要だ。  
この3つのサイクルをうまくコントロールすることで流行り廃りの影響を受けない100年先につながる「感幸地」が誕生します。

## 自治体等との連携



牛久沼を所有する龍ヶ崎市が中心となり、周辺の市町を巻き込み、さらに市民や地元企業、学術機関や茨城県の力を借り、互いに連携しながら「泳げる牛久沼」を目指すことが肝心だと考えます。

## 泳げる牛久沼を目指して

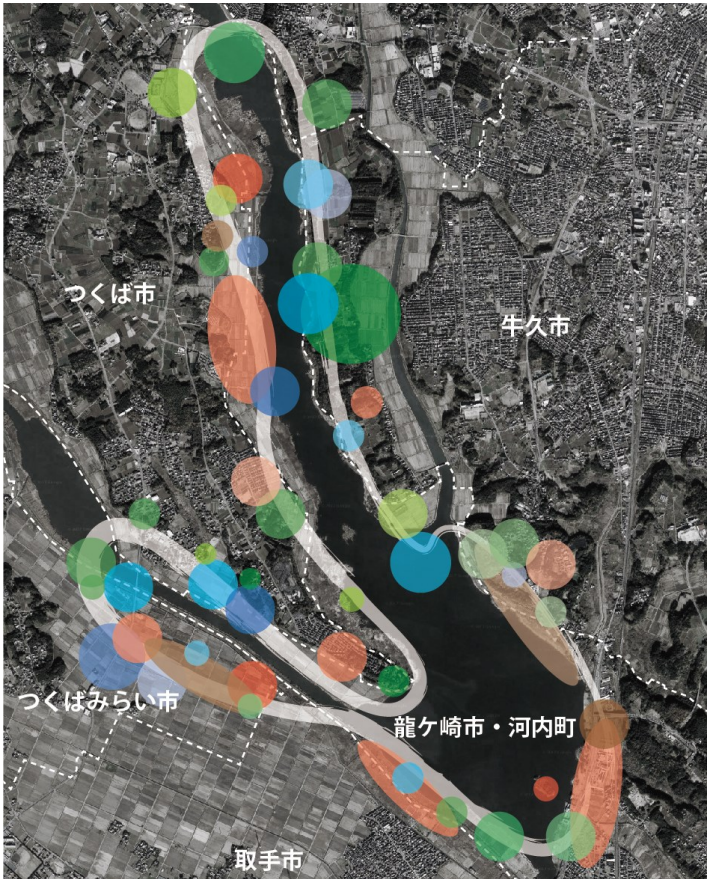
東京の日本橋川は長年にわたる活動で、有害物質の浄化や悪臭の改善など、人々が舟遊びを楽しめる程度まで水質が改善されました。

もし、牛久沼が安心して泳げる水辺として生まれ変わるのならば、それだけで周辺地域のかけがえのない資産となることは間違いありません。

長い視点で考えると、水質の改善は牛久沼を名所とするうえでは避けられない課題です。

周辺の市町と協力し、広域的な視点でいくつかの対策を実施することで「泳げる牛久沼」が実現すると考えます。

周辺5市1町の力をあわせて  
様々な魅力が散りばめられた「感幸地」へ



※トレイル=自然散策ルート、自然遊歩道

牛久沼トレイル (イメージ)



現在の牛久沼



■牛久沼トレイルのイメージ■

緑の中を抜け、水辺の上の棧橋をわたり、時には丘を登る。牛久沼トレイルでは植物や舗装材を工夫して一周20kmの物語を体験できるような表情豊かな道・広場を目指します。

一周20kmの道が「人」「自然」「賑わい」を繋ぐ  
牛久沼トレイルの提案

100年先につながる牛久沼の自然をつくる。  
それは牛久沼の水辺を中心として多種多様な植物が根を張り、そこにあらゆる生物が集まってくる未来を創ることです。そうした自然を人々が楽しめるよう牛久沼の自然と人とを繋げる一周20kmほどの道。歩くひと・走るひと・サイクリングするひとなどがのびのびと使うことの出来る「牛久沼トレイル」の整備を指します。

豊かな自然環境+

多様な文化拠点

牛久沼をただ眺めるだけでなく、牛久沼を囲むように周辺自治体が位置する特性を活かせないかと考えました。  
各自治体の特色を活かしたコンセプトを設定した広場や拠点を設けることができれば、自然と文化が交じり合う他にはないエリアが誕生します。  
収穫前の水田や夕陽がよく見えるスポット、ダイヤモンド富士が撮影

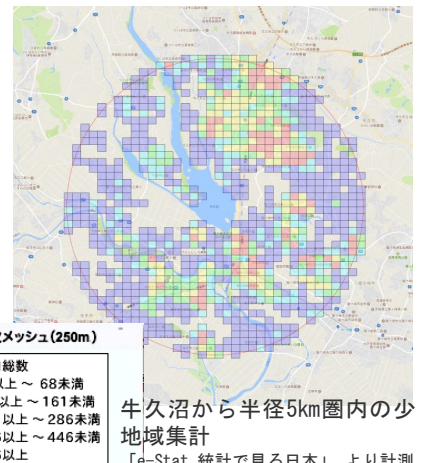
できる場所、白鳥が集う水辺など、今ある資産を加えるだけでも素晴らしい20kmになるはず。その先に行きたくなる自然と文化の魅力が散りばめ、どこからでも楽しく歩けるトレイルを目指します。

「まちの居間」を目指す

龍ヶ崎市の人口は2010年をピークに少しずつ減り始め、高齢化率は25.8% (2017年龍ヶ崎市統計)と増加傾向にあり、そういった時代に合わせるかのようにネット通販や宅配サービスは急激に進化を遂げつつあります。これらの変化により将来的にはまちの消費を支えるべき商店の数も減少すると考えられます。

今回のプロジェクトは、そういった地域の課題を踏まえ、牛久沼周辺の人も日常的に遊びに来ることができ「まちの居間」のように、末永く定期的に通える飽きのこない賑わいづくりを第一に考えています。

地域の人々が集まり活気づくことで賑わいに独自性が現れ、観光客にも支持される場となり、将来的に龍ヶ崎の誇りとなる場に成長することを目指します。



牛久沼名所化への起点へ6つのにぎわいづくり



名所の第一条件は「人が集まる  
ところ」です。人が集まらないと  
ころは、どんなに風景が美しくも  
名所にはなりません。名所は人  
と共有できる感動、体験を語り継  
ぐことで成り立っているからで  
す。

牛久沼を共に感動を共有できる  
大切な人を連れてきたいと多くの  
人々が思える場所へ。

まずは、道の駅を拠点とした賑  
わいづくりを皮切りに、水辺公園  
や中の島、国道6号線沿いのエリ  
アA・B、佐貫駅から牛久沼まで  
の道のりと水辺の賑わいづくりに  
注力することを目指します。

この6つの賑わいを名所化への  
足掛かりとします。



水上スポーツの発着点へ



牛久沼全体が花見スポットに



あらゆる水上スポーツを学ぶ拠点へ



地域の食材を堪能できるBBQパーク



牛久沼まで楽しい仕掛けがいっぱい



水辺に開いた道の駅へ

人×人×人…  
人をつなぐきっかけづくり

平成30年3月策定  
茨城県龍ヶ崎市市長公室  
道の駅・牛久沼プロジェクト課  
TEL 0297-64-1111  
<http://www.city.ryugasakibaraki.jp/>

牛久沼「感幸地」構想は、市公式ホームページのほか、中央図書館、各地区コミュニティセンターなど、市内の各公共施設でご覧いただけます。

100年先の「感幸地」へ

美しい水辺、多様な生物、豊かな草木、感動的な夕陽、水辺から見渡すことのできる富士山や筑波山など牛久沼にはすでに他の地域では得ることのできない豊かな自然環境があります。

この自然環境は龍ヶ崎市をはじめ周辺の地域にとってかけがえのない「資産」であることは明らかです。

本構想は豊かな自然と寄り添うように少しだけ手を加え、人と牛久沼の接点を数多く創ることで、牛久沼と共にある生活が地域の人々の心と体を豊にする「感幸地」へと成長することを目標としています。

多くの観光地のように外から人を呼びこむだけの場所として消費するだけでなく、継続的に牛久沼の自然を守り育ててゆく思いの輪が何より大切です。

100年先の「感幸地」へ。  
ここで生まれ育ち生活する全ての人々が「龍ヶ崎でよかった」と思えるまちづくりを目指します。